

忠信 (幾菊蝶初音道行)

恋と忠義は

いづれがおもい

かけて思ひははかりなや

静に忍ぶ旅立ちや

馴れぬしげみのまがひ道

弓手も馬手も若草を

わけつつ行けば

あさる雉子のぱつとたつては

ほろゝけんけんほろゝうつ

なれは子故に身を焦がす

我は恋路に迷ふ身の

アアうらやましねたましや

初雁金の女夫づれ

妻持顔のはねばかま

人よりましのましばさす

宇賀の御霊の御社は

いととうとくもこうこうと

霞の中にみかの原

わきてかたみの鼓のかはいの睦言も

人には包むふくさも

夫をたよりにつく杖の

心ほそ野を打過ぎて

谷の

鶯ノ初音の鼓

初音の鼓

調べあやなす音につれて

つれて招くさ音につれて

おくれ走せなる忠信が

吾妻からげの旅すがた

背に風呂敷しかとせたらおふて

野道畔道ゆらり

ゆらり軽いとりなりいそいそと

目立たぬやうに道へだて

才忠信殿

待ちかねましたわいなあ

コレハコレハ静様

女中の足とあなどつて

思はぬ遅参真つ平御免下さりませ

ここは名におふ吉野山

四方の景色もいろいるに

春立つといふばかりにやみ吉野の

山も霞みて

今朝は

見ゆらん

見渡せば

四方の梢も綻びて

梅が枝とう歌姫の

里の男子が声々に

我がつまが

天じょうぬけて

すえる膳

ひるの枕はつがもなや

天じょうぬけてすえる膳

ひるの枕はつがもなや

をかし鳥の一ふしに

弥生は雛の妹背中

女雛男雛とならべて置て

詠にあかぬ三日月の

宵にねよとはきぬぎぬに

せかれまいとの恋のよく

桜は酒が過ぎたやら

桃にひぞりて後向き

うらやましゅうはないかないな

せめては憂さを

幸ひ幸ひ

姓名添へて給はりし

御着せ長を取出し

君と尊い奉る

静は鼓を御顔と

よそへて上に

おきのいし

人こそ知らね西国へ御下向の御海上

波風あらく御船を

住吉浦に吹き上げられ

夫より吉野にましますよし

頓てぞ参り候はんと

たがいにかたみを取りおさめ

実に此の鎧を賜はつしも

兄嗣信が忠勤なり

「何 嗣信が忠勤とや」

誠にあれよこしかたを

思ひぞ出づる壇の浦の

海に兵船平家の赤旗

陸に白旗

源氏の強者

ア一ラ物々しやと夕日影に

長刀引きそばめ

某は平家の侍悪七兵衛景清と

名乗りかけ

なぎたて なぎたて なぎ立てば

花に嵐のちりちりぱつと

木葉武者

言いがいなしとや方々よ

三保の谷の四郎これにありと

渚に丁と打ってかかる

刀を払う長刀のえならぬ振舞いはずれとも

まさりおとりは波の音

打合う太刀の鏝元より

おれて引く汐 帰る雁

勝負の花を見捨つるか

長刀小脇にかいこんで

兜の鍔を引つつかみ後へ引く足たじたじ

向ふへ行く足よるよる

むんずと鍔を引切つて

双方尻居にとつかと座す

腕の強さと言ひければ

首の骨こそ強けれと

ンフフ、、アハハ、、笑ひし後は入り乱れ

手しげき働き兄嗣信

君の御馬の矢表に駒をかけすへ立ちふさがる

「オ、聞きおよぶ其の時に

平家の方にも名高き強弓」

能登守

「教経と」

名乗りもあへずよつびいて

放つ矢先はうらめしや

兄嗣信が胸板に

たまりもあへず

真逆さま

あへなき最後は武夫の

忠臣義士の名を残す

思ひ出づるも涙にて

袖はかわかぬ筒井筒

いつか御身も伸びやかに

春の柳生の絲長く

枝をつらぬる御契り

などかは朽しかるべきと

互いにいさめいさめられ

急ぐとすれどはかどらぬ

芦原峠の里

雲と見紛ふ三吉野の

麓の里にぞ

つきにける。